

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 5 月 30 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00914

研究課題名(和文) 日伊交流史の黎明期 明治維新直後のイタリア人による内地旅行と未公刊記録を中心に

研究課題名(英文) The dawn of the Italo-Japanese relations - Centering on travel journals by Italians exploring inner regions of Japan in the years immediately following the Meiji Restoration

研究代表者

BERTELLI GIULIO・ANTONIO (BERTELLI, GIULIO ANTONIO)

大阪大学・大学院人文学研究科(外国学専攻、日本学専攻)・准教授

研究者番号：60598431

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：コロナの蔓延によって国内外における史料調査・研究発表は計画していた通りには実現できなかったが、その分研究活動に没頭でき、初代駐日イタリア公使夫人マティルド・サリエ・ド・ラ・トゥールが遺した未刊史料(フランス語による手稿)の翻刻・英訳・註釈活動が捗り、2巻からなる著書にして、刊行できました。また、伊公使館で勤めた若い書記官ウーゴ・ピサの回想録の手稿の翻刻も進み、それに関する学術論文と香港大学での研究発表を行うことができました。最後に、イタリアの外務省外交史料館を訪れ、以前未公開だった日本関係史料を大量に見学・撮影でき、現在執筆中の日伊交流史の黎明期を中心とした学術専門書に利用したいと思えます。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究によって、現在まで日本外交史においてあまり注目されてこなかった幕末・明治初期の日本におけるイタリアの立場と役割について明らかにできました。また、日本を訪れたイタリア人などが遺した未刊史料を新たに発見し、翻刻し、英訳することによって、同時代の日本外交史に携わる国内外の研究者たちに初めてイタリア側史料を紹介し、その重要性を強調できました。特にイタリア公使夫人マティルドが1869年に行った日本内地旅行を中心とした旅行記は、有名なイザベラ・ハードのUnbeaten Tracks in Japanよりおよそ10年早く書かれており、西洋人女性による日本旅行記の中で最古のものであると言えます。

研究成果の概要(英文)：Due to the COVID-19 pandemic, I could not travel as I planned in order to gather new documents and present my research achievements at conferences both in Japan and abroad. However, I could concentrate on research activity, and I succeeded in transcribing, annotating, and translating into English the unpublished manuscripts (in French) about late Edo-early Meiji Japan written by Mathilde Sallier de La Tour, the spouse of the first Italian Minister in Japan, which I published in a 2-volume book. Also, I could transcribe a large part of the memoirs written by Ugo Pisa, a young secretary of the Italian Legation in Japan, and I could write an article and do an oral presentation (at Hong Kong University) about their contents. Finally, I could visit the Italian Foreign Ministry historical archives, where I could discover and photograph a large amount of new documents about Japan, which I will need to complete my book (work in progress) about the dawn of Italo-Japanese diplomatic relations.

研究分野：国際交流史、日伊交流史

キーワード：日伊交流史 未刊史料 マティルド・サリエ・ド・ラ・トゥール ウーゴ・ピサ 幕末・明治初期 蚕種貿易 駐日イタリア公使

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

幕末・明治初期に日本とイタリアの間で貿易関係が隆盛を極めていたことを知る人は非常に少ない。実際のところ、両国の歴史教科書にも、幕末・明治史に関する専門的研究にも、この事実に触れた記述は極めて稀である。また、幕末・明治初期における日伊関係、そして特に日本へ渡ったイタリア人に関する先行研究は少なく、断片的なものが多い。明治期の日伊交流史に関する先行研究は主に文化交流（お雇い外国人として来日した芸術家などとその活動、工部美術学校の歴史など）を中心としたものであるが、日伊外交・貿易関係の黎明期（1866-1873年）を網羅する研究はまだ存在していない。

1840-50年代頃から、ヨーロッパで「微粒子病」という蚕の病気が猛威を振るい始め、イタリアやフランスの経済は致命的な打撃を受けた。この危機を克服するために、ヨーロッパの養蚕家は未感染の地域で無病、そして良質の蚕種を仕入れるしかなかった。このような事態から、「蚕種商人」という新しい職業が生まれた。この冒険家のような商人たちは微粒子病の感染エリアが拡大すると共に、東欧、中東、東アジアを訪れ、やがて日本にまで辿り着いた。

日本の蚕種は良質のものだったため、1860年代前半にイタリア人蚕種商人が来日しはじめ、日伊蚕種貿易の規模は徐々に拡大した。数々の接触や失敗を経て、1866年8月25日に、イタリア王国と徳川幕府が日伊修好通商条約を締結し、翌年から、イタリアと日本は本格的に国交を始め、公使と領事が横浜に派遣された。そして、毎年夏と秋にかけて、訪日するイタリアの蚕種商人の人数が増加したことにより、日伊蚕種貿易の規模が増し、蚕種の輸出額は日本の総輸出額の20%程度を占める年もあった。

この貿易は微粒子病に対する予防策（顕微鏡検査）が普及し始めた1880年代初頭まで続き、この20年間で大勢のイタリア人が来日したため、この20年間は正に日伊交流の黄金時代と言っても過言ではない。毎年の夏と秋にかけて来日する蚕種商人（150名程度）以外にも、彼らの活動を保護・援助する駐日イタリア公使や領事の役割を注目すべきである。なぜなら、彼らは日本政府と交渉し、イタリア商人の便宜を図るという重大な役割を果たしていたからである。イタリアの商人、外交官、そして軍人などはお互いに密接に関わっているが、大きな変化を迎える日本を注意深く観察し、書簡、日記、回想録、刊行物により、我々に「外から見た日本」を全く新しい角度から見せる傍ら、知られざる幕末・明治初期の日本におけるイタリア人コミュニティに関する貴重な情報を提供している。

19世紀の在日イタリア人の「日本観」と「日本人観」を意識しながら、駐日イタリア人外交官、蚕種商人、軍人などの活動と役割を実証的に検証することによって、筆者の最終目標は次の4つの疑問点を追究して、学術専門書や学術論文でまとめて明らかにする。

イタリアは明治維新や日本の欧米化・近代化においてどの役割を果たしたか。

初代駐日イタリア外交官らは日本でどのような外交姿勢を見せ、どのように日伊関係の基礎を築いたのか。

駐日イタリア外交官は他国外交官とどう接し、どのような関係を持っていたか。

在日イタリア人の眼に、明治維新後の日本が迎える急激な変化はどう映ったか。

2. 研究の目的

本研究の主たる目的はイタリアおよび日本で未刊史料を収集・分析し、両者を照らし合わせることによって、幕末・明治期の日伊交流史の新たな事実および知られざる側面を明らかにし、徹底的かつ網羅的に日伊交流の黎明期の歴史をほぼゼロから書くことである。また、日伊交流史をいかに幕末・明治初期の日本の歴史的背景に位置づけられるのかという問題も極めて重要で、この位置づけを正しく行うために、同時に日米、日英、日仏関係史などを中心とした先行研究を活用しながら、国内外での発表などを通して日本の国際交流史におけるイタリアの「存在感」と立場を明らかにしていくことも本研究の目的とする。本研究の学術的独自性と創造性を特徴づける最重要なポイントは、研究の主な材料である史料の多くは近年新しく発見されたもので、その大部分がまだ公開・刊行されておらず、イタリアでも日本でもまだ知られていないことである。これらの史料は日本やイタリアなどの資料館や古文書館で保管されているが、近年、科研費を用いた調査で筆者はイタリアに渡り、そこで主に幕末・明治初期の日本を訪れた外交官、商人や軍人の末裔と連絡を取り、その個人書庫で何点か興味深い史料（私文書）を発見・確認することができた。筆者はまた、これらのイタリア側史料を分析し、その重要性について論じる傍ら、日本側史料などでその内容の信憑性を裏付ける作業を行うことも重要であるとする。筆者は英語やフランス語で書かれた史料を読むことも可能なので、なおさら本研究の学術的独自性を高めることができる。

本研究の主な課題は以下のとおりである。

幕末・明治初期の日伊交流史を中心とした学術専門書の執筆活動をつづけながら、初代イタリア公使夫人マティルド・サリエ・ド・ラ・トゥールが1869年6月に行った日本内地養蚕地域視察の旅行記やその他の未刊史料（手稿セットはおよそ250頁を超えるフランス語文の書簡）の全文を日本語、英語に翻訳し、一冊の書籍にまとめる予定である。これらの史料の中で、特に興味深いのは旅行記である。筆者が調査を行った結果、この旅行記は西洋人女性が書いた最も古い日本内地旅行記（123頁からなるフランス語文の手稿）であるとみられるため、その歴史的価値は極めて高いと思われる。更に、この旅行記と共に、マティルドが遺したスケッチブックも保管されており、その中で、伯爵夫人が旅行中に描いた植物、人物、景色などの素描が43点収録されている。また、内地旅行記以外の書簡で、横浜などにおけるマティルドの日常生活、女性の立場から見た日本文化のあらゆる要素の観察の成果、そして夫であった駐日イタリア公使ヴィットリオによる外交活動の舞台裏を垣間見ることができるため、大変珍しい日本関係史料であるとともに、外交官の活動を語る公文書の内容の裏付けに極めて役立つ私文書である。

2018年に発見した1870-72年に在日イタリア公使館で志願役員・書記官として勤めた若者ウーゴ・ピサ（Ugo Pisa, 1845-1910）の新たな研究に携わる予定である。筆者は2009年にこの人物による日本北部（蝦夷・東北）旅行を中心とした短い報告書を扱って、その全文を『イタリア學會誌』（第59号）で公開した。一方で、この報告書は旅行後に彼が当時の駐日イタリア公使アレッサンドロ・フェ・ドスティアーニ（1825-1905）に提出した公式なもので、イタリア外務省外交史料館に所蔵されている。その中で、ピサは数ページの手稿で1871（明治4）年秋に行った蝦夷・東北の内地で訪れた村々の様子とその経済を支える主な資源などに関する情報をまとめている。他方で、2018（平成30）年に発見したものは、末裔が所蔵するウーゴ・ピサの全く新しい、未刊のイタリア語による旅行記の手稿セットである。このセットは目次、5冊の手書きノートおよび綴じられていない紙（計約310頁の手稿）から構成されており、その題名は「Peregrinazioni in Estremo Oriente - Ricordi di un viaggio in China e Giappone」（「極東放浪記—中国、日本における旅の思い出」）である。

この膨大な一次資料において、ピサは上記の1871（明治4）年秋の日本北部旅行以外にも、中国、そして彼が訪れた日本各地における旅行・生活経験、訪れた地域の文化的要素、中国と日本の文化比較、中国人、日本人、アイヌなど住民との接触や文化衝突などについて綿密に記録している。また、ピサは書記官として、明治維新直後に、商人や軍人などのその他のイタリア住民が足を踏み入れたことのなかった日本の内地を旅行しているため、その内容は同時期の記録より新鮮味がある。目次に現れる記述からすると、彼は生前、この手稿をイラスト付き刊行物にする意図を持っていたことが窺える。この史料の内容を分析し、日本側史料などで裏付け、研究発表および論文掲載によって国内外でその歴史的価値を明らかにし、最終的にウーゴ・ピサの意図をちょうど150年後の年月を経て実現するために、刊行物にしたい。

国内外における史料調査に際して収集できた新たな史料、そしてマティルド・サリエ・ド・ラ・トゥールやウーゴ・ピサの記録とそれに関連した史料の内容分析プロセスの途中で得られた新たな情報を踏まえた上で、幕末・明治初期の日伊交流史を中心とした学術専門書や学術論文を執筆すること。そこで、上述した本研究の中心となる4つの疑問点を明らかにする。

3. 研究の方法

筆者は近年、その重要性にも関わらず、日本国内の学者にとってほぼ未知の領域である幕末・明治初期における日伊外交・貿易史を調査しているため、この分野に関する研究を牽引しているという自負を抱いている。筆者は国内外の学会（イタリア学会、明治維新史学会、伊日本研究会など）に所属することによって、国際交流史研究に携わる国内外の専門家、末裔との接触があり、これらの方々との連帯協力は新たな史料の発見及び斬新な発想へと導く。また、本研究の目的に沿って、調査、そして成果発表は、日本とイタリアだけでなく、国際的に人脈や研究ネットワークを広める傍ら、その他の国々の研究者や専門家にも、ほぼ知られざる幕末・明治期における日伊交流の役割と重要性を説く。

コロナ禍によって、実地における史料調査を断念せざるを得なかったが、2022、2023年度に主に日本とイタリアの古文書館において調査を行ってきた。日本では、外務省外交史料館、横浜開港資料館、東京大学史料編纂所などを中心に調査を行った。イタリアにおいて、ローマにあるイタリア外務省歴史外交史料館（ASDMAE）、イタリア国立古文書館（ACS）などで日伊交流史の黎明期に関係する未刊史料を数多く発見できた。また、ミラノにあるポッコロニ大学なども訪れ、そこでピサ関係史料を調べた。

こうしてイタリアや日本で収集できた史料を整理し、その内容を分析した上で、国内外で研究発表をし、学術論文や学術専門書を以って研究成果を発表した。

4. 研究成果

2020年度はコロナウイルス蔓延のため、資料収集などを目的とした出張を行わなかったが、比較的研究活動に集中することができ、初代駐日イタリア公使夫人マティルド・サリエ・ド・ラ・トゥール伯爵夫人(Mathilde Sallier de La Tour, 1838-1911)が1867年から1870年にかけての時期に執筆したフランス語による書簡や旅行記などの日本関係未刊資料の翻刻(英訳、注釈付き)を刊行しました。この刊行物は『The Travel Journals of Mathilde, Contessa Sallier de La Tour into the Interior of Japan, 1867-1870 Including Letters, Notes and Sketches』という題名で、2巻(全610ページ)からなり、第1巻には図版、仏語序文、手稿の翻刻(仏語本文+脚注)、第2巻には英語による序文、本文と脚注の英訳、索引が収録されています。本は国内外で販売されています。

次に、イタリアで出版された学術書には、「I viaggi in Giappone e Cina del semai Pietro Fe' D' Ostiani tra il 1870 e il 1875 - un memoriale inedito」(イタリア蚕種商人ピエトロ・フェ・ドスティアーニの1870-75年の日本・中国における旅行について 未刊回想録を中心に)という伊語による論文が掲載されました。この論文の中心となる回想録は蚕種商人による希少な記録です。

最後に、2月20日に、東京大学史料編纂所が主催したオンライン国際研究集会『幕末・維新期の日伊関係資料』に際して、「イタリアの古文書館・個人書庫に眠る日本関係史料とその魅力について―幕末・明治初期を中心に」という口頭発表を行いました。

2021年度は、初代駐日イタリア公使の妻であるマティルド・サリエ・ド・ラ・トゥールおよびその旅行記などの史料の国内外における知名度と重要性の理解を高めるために、2回オンラインで口頭発表を行った。1回目は「Informasia」(第4回)という国際研究会における「A Western Woman Travelling into the Interior of Japan in 1869: Travel Journals of Mathilde Sallier de La Tour, Spouse of the First Italian Minister Plenipotentiary to Japan」という英語による発表である。2回目は「イタリア史研究会」において、「初代駐日イタリア公使夫人マティルド・サリエ・ド・ラ・トゥールの旅行記に見る日伊交流の黎明期(1867-1870)」という日本語による発表である。

さらに、同テーマに関して、奈良女子大学の学生向けに、「初代駐日イタリア公使夫人マティルド・サリエ・ド・ラ・トゥールが見た幕末維新期の日本～書簡、旅行記やスケッチブックを中心に～」を題名とした講演会を開くこともできた。

同時に、1870年から1872年まで在日イタリア公使館において書記官として勤め、中国、そして蝦夷地を含む日本の内地を旅行したウーゴ・ピサの旅行記手稿(イタリア語)の翻刻、そして幕末・明治初期における日伊交流史を中心とした学術専門書の執筆活動を進めることができた。

2022年度は2021年に刊行した初代イタリア公使ヴィットリオ・サリエ・ド・ラ・トゥール伯爵の妻マティルドが遺した旅行記などの日本側史料について更なる研究を行いながら、マティルドという人物やこの史料の歴史的重要性を国内外に周知させるために、2022年7月に関西イタリア学研究会(ASIKA)において研究発表を行ったり、本年度7月にイタリアで出版される予定の『Fuori dal cono d'ombra』という日伊交流史における女性を中心とした書籍のマティルドに関する章を執筆した。また、2023年3月に、2020年に行う予定だったが新型コロナウイルスの蔓延によって行えなかった埼玉県、群馬県などにあるイタリア公使夫妻の一行が1869年に訪問した場所で、イタリア視察団を案内した者(遠藤しょう平)の末裔遠藤誠氏などに案内していただき、フィールドワーク・資料収集を目的とした旅行を行うことができた。その時に、イタリア公使の一行が訪れた寺院や施設を訪れることができただけでなく、前橋市にある群馬県立文書館などで史料調査を行うことができた。また、東京大学史料編纂所や横浜開港資料館でも日伊交流史や日本外交史を中心とした史料を閲覧することもできた。

次に、1870年から1872年まで日本を含む東アジアに滞在したイタリア公使館の若い書記官ウーゴ・ピサの未刊旅行記の翻刻作業を進めながら、2022年9月にイタリア・ミラノにあるボッコニ大学を訪れ、ピサに関する史料を閲覧・撮影することができた。

最後に、過去にイタリア、そして日本で集めてきた膨大な量の史料を整理しながら、その内容を分析することによって、最重要な情報を再確認しながら、日伊交流史の黎明期を中心とした学術専門書の執筆活動を続けている。

2023年度は、研究期間を延長することによって、まず、幕末・明治初期における日伊交流史研究を進めることができた。まず、名古屋大学の近現代史研究会の雑誌「年報近現代史研究」において、「幕末・明治初期の日本外交史における日伊交流史の重要性と位置づけ～イタリア側史料という新視点～」に掲載された学術論文で幕末・明治初期における日伊交流史研究の重要性、そしてイタリア側史料が日本外交史にもたらす新鮮味のある視点について論じた。

次に、1870-72年に日本に滞在し、蝦夷・東北地方などにおける内地旅行を行ったイタリア人ウーゴ・ピサの回想録（イタリア語による手稿）の翻刻を進める一方で、この未刊史料の内容、性質と重要性を中心としたイタリア語による学術論文を著書（分担執筆）『INDAGINI SUL GIAPPONE - Nuove prospettive di studio e ricerca』（日本についての研究と調査：学習と研究の新たな展望）において掲載できました。更に、2023年11月に香港大学專業進修学院において開かれた国際シンポジウムでピサの回想録について研究発表を行えました。

続いて、イタリアで刊行された著書（分担執筆）『FUORI DAL CONO D'OMBRA - Storie di donne fra l'Italia e il Giappone』（影の範囲を脱出して 日本とイタリアで活躍した女性たちの物語）において、イタリア公使夫人マティルド・サリエ・ド・ラ・トゥールに関する部分を担当しました。

最後に、2023年9月、そして2024年2月にイタリアで史料調査を行い、特にローマにあるイタリア外務省歴史外交史料館において、新たに公開された日本関係公文書を大量に発見・撮影できました。これらの史料は執筆中の日伊交流史の黎明期を中心とした学術専門書で活用したい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 3件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 BERTELLI Giulio Antonio	4. 巻 1
2. 論文標題 I viaggi in Giappone e Cina del semaio Pietro Fe' D' Ostiani tra il 1870 e il 1875 - un memoriale inedito	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Sguardi sul Giappone (学術書)	6. 最初と最後の頁 149-170
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.48231/97888754348541	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 ベルテッリ ジュリオ アントニオ	4. 巻 1
2. 論文標題 幕末・明治初期の日本外交史における日伊交流史の重要性と位置づけ：イタリア側史料という新視点：外国人研究者からみる近現代史研究	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 年報近現代史研究	6. 最初と最後の頁 61-70
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 BERTELLI Giulio Antonio	4. 巻 1
2. 論文標題 Le "Peregrinazioni nell' Estremo Oriente" di Ugo Pisa. Testimonianza inedita di un giovane diplomatico italiano in Cina e Giappone (1870-1872)	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Indagini sul Giappone. Nuove prospettive di studio e ricerca (学術書)	6. 最初と最後の頁 53-77
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 BERTELLI Giulio Antonio	4. 巻 1
2. 論文標題 Mathilde Sallier de La Tour - Una contessa alla scoperta del Giappone (1867-1870)	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 FUORI DAL CONO D'OMBRA - Storie di donne fra l'Italia e il Giappone (学術書)	6. 最初と最後の頁 22-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 6件 / うち国際学会 5件）

1. 発表者名 BERTELLI Giulio Antonio
2. 発表標題 La contessa con il revolver - La vita e le avventure di Mathilde Sallier de La Tour in Giappone tra il 1867 e il 1870
3. 学会等名 関西イタリア学研究会 (Associazione di studi italiani del Kansai) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 BERTELLI Giulio Antonio
2. 発表標題 A Western Woman Travelling into the Interior of Japan in 1869: Travel Journals of Mathilde Sallier de La Tour, Spouse of the First Italian Minister Plenipotentiary to Japan
3. 学会等名 Informasia (n.4 - online) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 ベルテッリ ジュリオ アントニオ
2. 発表標題 初代駐日イタリア公使夫人マティルド・サリエ・ド・ラ・トゥールが見た幕末維新期の日本 ~ 書簡、旅行記やスケッチブックを中心に ~
3. 学会等名 奈良女子大学アジア・ジェンダー文化学研究中心 企画セミナー (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 ベルテッリ ジュリオ アントニオ
2. 発表標題 初代駐日イタリア公使夫人マティルド・サリエ・ド・ラ・トゥールの旅行記に見る日伊交流の黎明期 (1867-1870)
3. 学会等名 第11回イタリア史研究会 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 ベルテッリ ジュリオ アントニオ
2. 発表標題 イタリアの古文書館・個人書庫に眠る日本関係史料とその魅力について－幕末・明治初期を中心に
3. 学会等名 幕末・維新期の日伊関係史料（東京大学史料編纂所主催オンライン国際研究会）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 ベルテッリ ジュリオ アントニオ
2. 発表標題 日本内地紀行 1869年に日本の内地を旅した初代駐日イタリア公使夫人 マティルド・サリエ・ド・ラトゥールの足跡を辿って
3. 学会等名 イタリア文化会館・大阪 オンラインイベント（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 BERTELLI Giulio Antonio
2. 発表標題 Peregrinations in the Far East - The Unpublished Travel Memoirs of Ugo Pisa, a Young Italian Diplomat in China and Japan From 1870 to 1872
3. 学会等名 第 13 回 国際日本語教育・日本研究シンポジウム つながる多様性、広がる可能性 （香港大学）（国際学会）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 BERTELLI Giulio Antonio	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Eureka Press / Routledge	5. 総ページ数 610
3. 書名 The Travel Journals of Mathilde, Contessa Sallier de La Tour into the Interior of Japan, 1867-1870 including Letters, Notes and Sketches - In Two Volumes	

〔産業財産権〕

〔その他〕

Researchmap - BERTELLI Giulio Antonio
<https://researchmap.jp/brtgnt76-7-19>

大阪大学研究者総覧・ベルテッリ ジュリオ アントニオ
<https://rd.iai.osaka-u.ac.jp/ja/cf0ff9dc876ae056.html>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------